



Pueblo church, New Mexico

Observations

観視

写真 渡邊博史



Highway 212, Montana



Street Lamp, Los Angeles



Washington Monument, Washington DC



Santa Monica Pier

往還の迷路

鈴城雅文

まず見て、そして撮る。写真とはそのようなものと、考えられがちだが、それが往路の事実だという限定を、忘れるべきではあるまい。まず撮って、そして見る。そのような帰路の事実は、無視されがちなのだ。写真家が写真を選ぶのは、帰路の仕事である。往路ではレンズという冷ややかなガラスの眼が、帰路には体温を具えた人間の網膜が登場する。

往路の眼差しと帰路の眼差しが背反した場合に、写真家は往路のそれを抹殺することもあれば、むしろそこに写真の根を見届けようと、レンズの眼差しを容れることもある。"Observations"の写真家は後者に属している。写真という他者の「寡黙な饒舌」に耳を傾けること。換言すれば網膜を耳にすることこそ、写真を撮り／見るものの仕事ではないか、とである。

たとえば、一枚の写真。写真家は撮影した場を明記しつつ、日時については沈黙している。しかしそれが2001年9月11日以前であることは明らかだろう。多くの移民の上陸地であったエリス島の建物から、窓ガラス越しにマンハタンを望んだこの写真からは、すでに撮影時とは別の声が送り届けられてくる。いまはないWTCが、窓の外に、いまなおあるから。

とはいえそのようにして写真家は、9.11の「出来事」の告発を目論んだのではない。それ自体は同一であるはずの写真が、別の印象をもたらすのはなぜかと、見るものに問いかけているのだ。写真に直截な意味を期待するものは、だれであれきつと、思いによって写真を歪めずにはいない。しかしまた思いから自由に、写真を見る方途はあるだろうか？

おそらく思いを発条とするほかに、写真を見る方途はない。だからこそ見えている写真を疑うことが必要になる。それは見ている眼差しを疑う作業を促す。たんに写真は、見るための道具、なのではない。ときにそれは見ることを見る鏡として、映された対象を超え注がれた眼差しを反射する。見ることと見られることの、往還の迷路へと観者を誘いつつ。



Ellis Island 2, New York

渡邊博史 わたなべ ひろし
北海道札幌出身。1975年日本大学芸術学部写真学科を卒業後、アメリカ、ロサンゼルスに移住。テレビコマーシャル制作の仕事につく。1993年UCLA(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)でMBA修士号を修得。1995年ごろから個人的な作品として写真を撮り始める。2000年本格的に写真に取り組み、ファインアート写真家として活動を始め、以来アメリカで多数の個展を行なう。作品はフィラデルフィア美術館、ヒューストン美術館、ジョージ・イーストマン・ハウス、サンタバーバラ美術館などでコレクションされている。写真集に『私は毎日、天使を見ている。I See Angels Every Day(窓社刊)がある。

鈴城雅文 すずき まさふみ
乙女座生まれ。著書に『原爆=写真論 「網膜の戦争」をめぐって』(窓社)『写真=その「肯定性」の方位』(御茶の水書房)『写真=紙の鏡の神話』(せきた書房)がある。

©2004 Hiroshi Watanabe All Rights Reserved
54ページに渡邊博史写真展の案内を掲載。